

令和5年度・令和6年度「ちばっ子の学び変革」推進事業研究成果報告書

長南町立長南中学校

研究主題

「主体的に学び表現する生徒の育成 ～根拠を明確にして書くことの学習を通して～」

1 学校の概要

長南町は房総半島中央部に位置し、自然豊かで景観の美しい町である。少子高齢化、過疎化が急速に進んでおり、課題となっている。本校は、昭和36年に長栄中学校と東西中学校を統合して町内唯一の中学校として開校した。平成29年度から町内4小学校の統合により、長南小学校が本校の敷地内に新設され、小学校を併設した小中一貫型授業が開始となる。令和4年、町規則施行により、小学校併設型中学校となった。

男女の仲が良く、協調性に富み、性格も温和で素直な生徒が多い。「郷土を愛し、未来を拓く創造的な知性と体力を身につけた心豊かな生徒の育成」を学校教育目標とし、教育活動を行っている。

2 研究の概要

(1) 児童生徒の実態と課題

① 令和4年度、令和5年度「全国学力・学習状況調査」より

ア 国語の点数・・・県・全国とほぼ同点である。(R4)⇒県・全国をやや上回る。(R5)

イ 観点別「書くこと」・・・県・全国をやや下回る。(R4)⇒県・全国とほぼ同点である。(R5)

ウ 記述式問題・・・無解答が極端に多い。(R4)⇒無解答が大幅に減少した。(R5)

② 同調査の質問紙より (R4→R5)

ア 「国語の勉強が大切」(91%→86%)「国語の授業の内容が分かる」(94%→97%)「国語の勉強が好き」(74%→69%)「国語は将来役に立つ」(77%→94%)等、国語の学習に対して肯定的に捉えている生徒が多い。

イ 「自分の考えがうまく伝わるよう資料や文章、話の組み立てなど工夫して発表していたか」(67%→69%)「自分の思いや考えをもとに、作品や作文など新しいものを創り出す活動を行っていたか」(55%→69%)以上の結果から、改善は見られるものの、自分の考えを書いたり、発表したりする活動においては、今後も継続した取組が必要であることが分かった。

③ 令和4年度、令和5年度「千葉県標準学力検査」より

国語については、すべての学年が県平均をやや上回り、基礎・基本が定着していることがうかがえる。また、どの観点も県平均から大きく下回る観点はなかった。

④ 普段の学習の様子より

ア 真面目な学習態度で、落ち着いて学習に臨んでいる。

イ 文章によって説明したり、自分の意見を書いたりすることに苦手意識のある生徒が多く、感想や作文を書かせたときには、「何をどのように書いていいのか分からない」という生徒も見られる。

以上のことから、本校生徒の課題として、「書くこと」におけるこれまでの学習経験の少なさが、自分の考えについて、根拠を挙げたり構成を工夫したりして表現することの苦手さにつながっていると推測できる。

「書く力」を高めるためには、まず「何を問われ、何を書くべきかを生徒自身が理解する」必要がある。その上で、「自分の考えをもたせる」ことが大切である。各教科において「なぜ、そのように考えるのか」という根拠を明確にもたせ、条件に合わせて書く経験を積ませていきたい。

(2) 学力向上のための取組

① 全職員による取組

ア **校内研修Ⅰ**「主体的に学び表現する生徒」をどのように育成するか。(令和6年5月14日実施)

東上総教育事務所より指導主事を招聘し、「教科等横断的な視点と情報活用能力、フィードバック過程」の講話を頂いた。「学力向上」のためには、特定の教科だけで取り組むのではなく、学校組織全体で取り組むことが大切であること、また、「全国学力・学習状況調査問題」を解くことで、「今、求められている資質・能力」とは何かを明らかにすること、教科等横断的な視点で授業改善に取り組むために、『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム』の活用を充実させること等、共通理解を図った。

研修後に行ったアンケートから、以下のことが分かった。

- ・ ほとんどの教員が授業内で「書く活動」を取り入れていた。(R5、R6)
- ・ 「根拠を明確にして書く活動」までは行えていなかったことに気付いた教員もいた。(R5)
⇒ すべての教科で「根拠を明確にして書く活動」を取り入れることができている。(R6)
- ・ 自身の教科指導の中で、具体的にどのような活動ができそうかを質問したところ、「口頭で根拠を元に説明する活動を行う」「文章を書かせるときに、ポイントとなる点を書き出させる」「レポート作成を積極的に取り入れていく」等が挙がった。(R5、R6)

校内研修Ⅱ令和5年度、令和6年度「全国学力・学習状況調査の分析」

本校生徒の正答率が低かった国語の問題を全職員で解き、どのような資質能力が今求められているかについて分析し、共通理解を図った。その後、教科ごとに集まり、自身の教科でどのような取組ができそうか、授業改善の方策について話し合った。他教科の問題を解くことで、「生徒たちの困り感を知ること」「情報活用能力の必要性」「複数の資料を総合的に見て比較する等、違いを見取る力をつけていくこと」に気付くことができた。



イ 思考を広げるためのICTの活用

話合いの根拠を集めるための調べ学習として、1人1台端末やパソコンを活用する。また、「個の考えを全体で共有するための思考ツール」として、授業支援ソフト(「オクリンク」や「ムーブノート」等のアプリケーション)を活用し、自分の考えを明確化するきっかけとする。

ウ 「振り返りシート」の活用

「この授業で学ぶことは何か」「どのような力を身に付ければよいか」が明確となった学習課題を把握することで、分かったことやできるようになったことは何か、分かるために、どのような工夫を試みたか等、自身の学びについて具体的に振り返る機会を作る。

エ 「フィードバック過程」の実践

同じ単元の中で、第一次評価を行い、添削をして返却し、その後、清書させたものを提出させ、第二次評価を行う。生徒が主体的に学びに向かうことをねらいとし、取り組ませる。

オ 「ループリック評価」の実践

学習目標の達成度を測るため、「評価の観点」と「評価基準」を数段階に分けて示す。条件を満たす、かつ、自分で情報収集して学習を進め、学びの調整を図ることをねらいとする。

② 国語科による授業実践

ア 1年生 「星の花が降るころに」～ファンレターを書こう～ 【指導案：別添資料1】

- ・ ファンレターの条件として、「登場人物」「場面展開」「比喻表現」に着目することを約束事とし、これらを分析する際の着目点と位置付けた。
- ・ 根拠となる「効果的な比喻表現」を使用するにあたり、「デジタル教科書」を活用し、様々な比喻表現を見つける活動を行った。
- ・ ファンレターを書く際には、教師モデルを作り、授業支援ソフトを活用して生徒に提示した。
- ・ 「書く活動」では、生徒自身が「1人1台端末に入力」か「手書き」かの選択をし、個別最適な学習方法を選べるようにした。また、個に応じた課題も用意し、実態に応じた学習を目指した。

イ 2年生 「根拠の適切さを考えて意見文を書こう」 【指導案：別添資料2】

- ・ 4月に報道された「人口戦略会議」の「消滅可能自治体」のニュース記事から、「2050年に長南町が消滅しないようにするためにはどうすべきか」をテーマとして意見文を書く活動を行った。
- ・ 「意見と根拠」、「根拠と意見をつなぐ考え」を意見文に入れることを条件とし、教師モデルを提示した。
- ・ 「根拠」を複数入れること、「反論と反論に対する意見」を書くことを条件とした。
- ・ 授業支援ソフトで他の人の構成メモを読み、反論カードを付け加える活動を行った。

ウ 3年生 「多角的に分析して書こう」 【指導案：別添資料3】

- ・ 過去3年間分の広報を1人1台端末で見られるように設定し、デザインの違いや作者の意図などの観点を立てて、個別で分析を行った。
- ・ 単元の始めに「ループリック表」を提示したことで、生徒一人一人が目標をもって取り組んだ。
- ・ 教師モデルがいつでも見られるように、1人1台端末に設定し参考にさせた。
- ・ 「400字程度で批評文を書くこと」とし、手書きか1人1台端末に入力かを個々に選ばせた。
- ・ 「フィードバック過程」を取り入れ、第一次評価を受け、再提出の後、第二次評価を行った。

(3) 加配教員（学習サポーターを含む）の活用

学力向上のための取組の一つとして、「少人数指導」を実施した。既習学習の習熟度による学力の違いから、生徒個々が課題とする内容は多岐にわたっている。そのため、T・Tによる授業を展開し、困っている生徒への指導・助言を行った。その結果、どの生徒も自分の考えを意識した学びや、根拠を明確にして自分の考えを伝え合う場面を増やすことができ、きめ細やかな支援体制を確立することができた。



数学科



国語科



技術・家庭科（技術分）

3 研究の成果

(1) 全教科による授業実践

ア 全職員による校内研修

全職員による校内研修をしたことで、「学力向上」のためには、特定の教科に任せるのではなく、学校組織全体で取り組むことが大切であることに気付き、共通理解を図ることができた。また、他教科の問題を全職員で分析したことで、多角的な視点から多くの気づきを得ることができた。どの教科でも「根拠を明確にして書く活動」を意図的に位置付けるきっかけとなった。

音楽科の授業では、表現の工夫点を発表させる際の根拠を求めたところ、歌詞だけではなく音楽記号等にも着目する生徒が増えた。

社会科の授業では、自分の考えをまとめる際、明確な根拠を探すためにICT機器を活用したが、他者が納得するように、違う立場の考えを想定することや、メリット・デメリットの両面にふれることなどを求めたところ、多面的に物事を捉えようとする姿勢が身に付いてきた。

イ 思考を広げるためのICT機器の活用

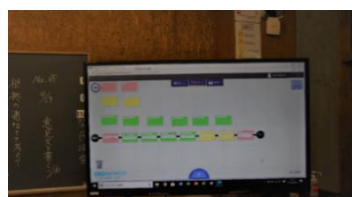
友人の考えが容易に共有できたため、話し合い活動が充実した。自分の考えが明確になり、生徒は意欲的に学習に取り組むことができた。授業支援ソフトにより提出した作品を評価し、さらによりよいものにするための再考を生徒に促す教員もいた。また、ICT機器を活用することで、「書くこと」を苦手とする生徒にとって、学びやすい環境になった。

技術・家庭科の授業では、「実物見本」と「製作の過程を撮影した動画」を用意し、電子黒板を活用したところ、自身に今必要なことを捉え、自己の課題に合わせて学びの調整を図る生徒が出てきた。

保健体育科の授業では、1人1台端末を活用した学習を取り入れたことで、動画で自分の動きを撮影して確認をしたり、お手本の視聴をすることで自身の体の動きに反映させようとしていた姿が見られた。



授業での活用の様子



生徒同士の意見の共有



担当教員による評価

ウ 「振り返りシート」の活用

学習のまとめや振り返りを自分の言葉で書いて蓄積することで、生徒自身が分かったことや課題の分析、思考の広がりについて認識することができた。学習の足跡を残したことは、学習内容の定着にもつながった。また、「次時は〇〇ができるようにしたい」「家で△△に取り組んでくる」等、主体的に取り組む生徒が見られた。

保健体育科の授業では「何を意識したか」「やってみてどうだったか」「次回はどのような所に気を付けるか」を意識して記入させると、抽象的な文章ではなく具体的な反省を書ける生徒が増えた。

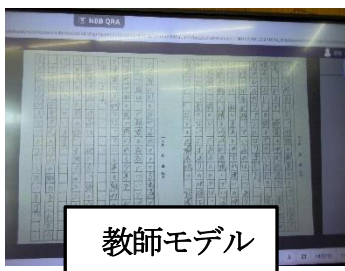
エ 「フィードバック過程」の実践

学びの過程で「フィードバック」を取り入れたことで、よりよい評価を得ようと自主的に周囲と意見交換する生徒の姿が見られた。

理科の授業では、実験結果をレポートにまとめる際に、提出されたレポートを評価（第一次評価）し、教員が添削、助言をして返却した。その後、清書を再提出し、評価（第二次評価）をした。

（2）国語科による授業実践

- ・ 書くことの目的が明確となった言語活動を位置付けたため、主体的に表現する生徒が増えた。
- ・ 教師見本を提示して分析したことで、学習の見通しをもって取り組む生徒が増えた。
- ・ 「実践モデルプログラム」の学習過程を位置付けたことで、主体的に学習を進めることができた。
- ・ 個別最適な学びを目指し、1人1台端末に入力か手書きかを選択させた。また、生徒の実態に合わせて課題を用意し、習熟度別の実践をしたことで、学習意欲の向上につなげることができた。
- ・ 作文の学習では、「フィードバック」を取り入れたことにより、よりよい評価を目指し、ノートに自主的に下書きをするなど、主体的に学習に取り組む生徒が見られた。
- ・ 「ループリック評価」を取り入れたことにより、生徒たちから「より上の評価を目指したい」という肯定的な意見や、学びの調整を図る生徒の姿が多く見られた。



教師モデル



個別最適な学習方法の選択



班ごとの意見交換

4 今後の課題

今年度の取組をふまえ、来年度以降、以下の点について研究を進めていく。

- ・ すべての教科で「根拠を明確にして表現する」学習を位置付けることを目指したが、教科の特性上難しい教科があった。今後はよりよい実践を考える必要性を感じた。
- ・ 「フィードバック」を取り入れたが、限られた教科のみの実践となってしまった。今後は、多くの教科で取り入れやすい方法を検討していきたい。
- ・ 教師モデルを提示したが、参考にして書いていた生徒が多かった一方で、モデルに影響を受け、オリジナルの作品が書けない生徒がいた。モデルの在り方の検討が必要である。
- ・ 2年間の研究を通しての成果、課題を踏まえ、今後の長南町の子供たちが、自ら考え、生き生きと学び合う姿を目指し、さらなる研究を進めていきたい。